

# 謎の男ソラン

かぶらやこうし  
鋪谷嘴矢

そいつは大男だった。

袴をつかまれ、吊るし上げられたあたしの足は、地面から一フィート以上離れていたはずだ。

このまま床に叩きつけられでもしたら、大ケガをしてしまう。そんなのはごめんだ。

「だから、あたしは頼まれてメモを渡しに来ただけなんですって」

「下ろしてやれ、ボレレツカ」

大男の後から声がした。甘ったるい声だ。

「わかりました。スキヤフィーノさん」

突き放すように磨き上げられた床に投げ出されたあたしの目の前に、床以上にピカピカの靴が近づく。

顔を上げると、甘い声がぴったり似合う、黒髪の伊達男が見下ろしていた。

「名前は何？」

あたしは名乗った。

「では、もう一度きく、このメモを渡したソラノという男はどんな奴だった」

あたしは起き上がって、汚れたオーバーオールをはたいた。

男を見上げる。

「それが、路地裏の暗いところいきなり金とメモを渡されただけで……」

「ふざけるな」

たちまちボレレツカが大声をあげる。

「おいおい、小さくて汚れてて子供とはいえ、相手はレディーだ。乱暴はやめておけ」

「そうだ。もっと丁寧に扱え！」

「なんだとっ」

「やめろって。しかしな、お前だってこのメモを見ただろう。見ないはずはないよな」

「……見たよ」

あたしは不承不承うなずいた。

「意味はわからなかったけど」

「『やって来たぜ。ラルク・シテイの再現だ ソラノ』ラルク・シテイでは、俺のオジキが殺されたんだ。このソラノって奴にな」

「し、しらなかつたんです。そんな……そんな危ない話のメモだっただけでわかってたら、持つてこなかった」

「ついてないレディーだ……しかし、お前、どこの出身だ？この辺じゃ見かけない顔だが」

「昨日、列車でこの街にやって来たんです。その前にはポルトネにいたんですが、この大恐慌で仕事をクビになったから」

「嘘つけ！おめえみたいなガキを雇う工場があるものか！」

「こう見えても結構トシをとってるんですよ」

「何いってやがる。どう見たって十四、五ってとこだろうが……」

「年はどうでもいい。話っぷりを聞いていたら、なかなかしっかりしている。だからレディと呼んでいるんだ。きつと、ソラノの人相もはっきりと憶えているだろう。教えてくれ」

「さっきも言ったように、暗かったし、駅に着いて一文無しで途方に暮れていた時、大金を見せられたもんで、その金ばかりに目がいつて、男の方はちゃんと見てなかったんです。ただ、ものすごく恐ろしい雰囲気の中だったことは確かです。このボレレッカという人と同じぐらい背も高くて……」

「そうだろうな。奴がそんなミスをするとは思えない。クソっ、どうなってるんだ。最近  
は！お前たちが撃つ流れ弾が『一般人』に当たりまくって当局に目をつけられ、締め付け  
が厳しくなったとたんに、ソラノだ」

「それが妙なんですき、ボス。俺たちだって、バカじゃねえ。通行人なんか撃つわけはあり  
やせん。きつと……あれはトミーガン（サブマシンガンの名称）が不良品で弾丸（たま）  
がバラつくからですよ」

「と、とにかくですね、もう一度、ソラノに会えば、絶対にわかりますよ」

少しでも早く、この殺し屋の集まりから逃れたくて、あたしは口をはさんだ。

「よし、では、ソラノを見つけて俺に教えてくれ、これはその札の前払いだ」

そういつて、スキヤフィーノは手の切れるような札を、何枚もあたしの手に握らせた。

「おい、レディを外までお送りしろ」

デカブツは、黙って頷くと。あたしを建物の外まで連れて行った。

だけど、丁寧だったのはボスの前だけ。ボスの目の届かない通用口に来ると、あたしを  
目の高さまで持ち上げて、ガクガクと揺さぶって言った。

「ボスは、ああいつてるが、俺はお前をレディなんて思っちゃいない。だだのガキだ、小  
ずるく陰険で、しかも汚い。お前みたいなガキはいやというほど見てきたんだ。だから、  
その扱ひも知っているのさ」

そういつて、大男は、あたしの顔を何回かはたき、地面に投げ出した。

「いいか、お前にはいつも目をつけているからな、逃げようとしたら、首をへし折るぞ、  
早くソラノを見つけて来い！」

ボレレッカが、建物に入ると、通りの奥にいた人影があたしに走り寄ってきた。

「どうしたの？あなた、大丈夫？あ、腕から血が出るわ」

地面に転がって、痛みが治まるのを待っていたあたしは、寝ころんだまま、その影を見  
上げた。

ビルの谷間にさす夕陽に照らされて、少し赤みがかった金髪に縁取られた、顔にほかにそばかすの残る少女が、あたしを見下ろしていた。

その子は、アルマイラと名のり、半ば強引に自分の家にあたしを連れて行った。

「いや、ほんとにいいって。あんたの家族だって、あたしみたいな流れ者を家に泊めたかないだろうし……」

「心配いらないわ。わたしはひとりだもの。父さんは去年、ギャングの流れ弾に当たって死んだし、母さんも今年の冬に無理がたたって病気になって死んだ。たぶん、わたしも近いうちに死ぬんだから……」

言葉の内容自体より、その乾いた口調があたしの胸を刺した。

「アルマイラ……」

「マイラでいいわ。それに家といっても、取り壊されるのを待つだけのぼろアパートなんだから。さ、遠慮しないで」

「わかった。ありがとう」

「荷物はわたしが持つてあげる。この小さな鞆だけ？あ、重いわね」

あたしは鞆を開けて中を見せた。小さいがしっかりと造りのハンマー、ヤスリ、そして大きなボルトねじ。

「前の工場でもらった退職金さ」

とうの昔に電気を止められた薄暗い部屋で、マイラはあたしの腕の手当をしてくれた。

夜はふたりで一つのベッドで眠った。

次の日。お上りの観光客目当ての置き引き、かっぱらい、そしてお涙ちょうだいの物乞いといった、生活のための『仕事』をしに出かけるといふマイラに、あたしは、スキヤフイーノの金を半分渡していった。

「宿代。ソラノを見つければ、また礼金がもらえるんだ」

「じゃあ、あたしも手伝うよ」

それから、あたしたちは、ソラノを探して街を歩きまわった。

それこそ、裏町の裏通りの、ドブ板の裏まで剥がすようにして回ったけれど、どこにいったのか、ソラノの姿は見あたらなかった。

「もう、街を出たのかも」

肩を落としてマイラがいう。

「いや、それはないね。スキヤフイーノが駅と道路で見張らせているはずだから、この街の中にいるはずだよ……そうか、撃ち合いで家族を殺された人なら、奴をかくまうかもしれない」

あたしは、マイラといっしょに、流れ弾で死んだ人の家族を訪ねてまわった。しかしソラノはみつからなかった。

三日後の夜、駅の裏通りで、あたしたちはボレレッカに捕まり、土曜の正午までにソラノを見つけるように脅された。

再び地面に転がったあたしを起こしつつ、去っていく大男の背中に向かって、マイラが唸るようにいう。

「ちくしょう。あいつの撃ったトンプソンの流れ弾で父さんは死んだんだ」

「そうだったの」

「だから、いつか、あいつをわたしのこの手で殺してやるんだ」

「物騒なことを言うもんじゃないよ」

そう言いながら、真剣な眼差しで、興奮に頬を染めるマイラを美しいとあたしは思った。今はまだ子供っぽさが先に立つが、あと数年もすれば、ひと皮むけたように美しい女になるだろう。

「なに？何か顔についてる？」

「いや、何でもない。さあ、今日は水曜日だ。あと三日たらずしかないから。何か方法を考えないとね」

しかし、実際、良い方法など思いつかないまま土曜日の朝がやってきた。

昼近く、出かける用意をしていると、思い詰めた表情でマイラがいった。

「ねえ、あなたは一度スカヤファイノの家に入った。そして、これからまた入ることができるんですよ。だったら、わたしを連れていって」

「何をいうの」

「屋敷の中に入って、スカヤファイノに会いさえすれば、あとは自分で何とかするから」

「なんとかする？」

マイラは黙って、部屋の隅の木箱を動かし、床の上に現れた穴から、何かを取り出した。

「マイラ……あんた、それ」

「ダイナマイトよ。大丈夫。ギャングが銀行強盗で使うニトログリセリンなんかよりずっと安全なんだから」

「どうして？」

「父さんは技師だったの。今度、ホテルの跡に建てられる世界一高いビルの地下を掘るためのダイナマイト技師」

「でも、それは止めた方がいい。あたしは一度ソラノに会ってる。奴は必ずスカヤファイノを殺るはずさ。それほど恐ろしい男だったよ」

マイラは頷いたが、その目は納得していそうもなかった。

「それ以上、近づくんじやない」

初めてスキヤフィーノに会った場所で、同じようにギャングたちに囲まれ、あたしは叫んだ。

「実は、この屋敷に、ソラノはもう来ているのさ」

「なに、どこだ」

「慌てるな、探せ。屋敷のどこかなら見つけ出せる」

男たちは全員が部屋から走り出ていった。

「まあ、どのみち、おまえを人質にすれば出てくるだ……」

「いや、それじゃ無理だ」

あたしは、スキヤフィーノの言葉を遮った。

いま、部屋には、スキヤフィーノとあたししかない。

「おっと、それ以上、動くんじやないよ、レデ」

奴は、最後までセリフを言えなかった。素早く走り寄ったあたしが隠し持ったナイフで心臓を突いたからだ。

信じられない、という顔で、スキヤフィーノは倒れていく。

「驚いたかい？あたしがソラノなんだよ。この後、お前の部下たちが帰ってきたら、部屋の隅で怯えながら、逞しい大男のソラノが、お前を殺した様子を話すのさ。それで、神出鬼没のソラノがこの街でも仕事をした事が世にでる。伝説が広がる。初めに言ったように、あたしは、見かけよりずっと年を取ってるのさ。あんたらが見積もった倍程度にはね。だから、レディと呼ばれるのは正直嬉しかった。まあ、あんたが小悪党じゃなきやもつと……もう聞こえない、か」

「思った通りね」

振り返るとマイラが立っていた。

「……」

その横にボレレッカもいる。他に人影はない。

「今さらだけど紹介するわ。私の父よ。実のね。そしてこちらがソラノさん。お互い顔見知りだろうけど、知らないことが多かったみたいだから。残念だけど、あなたには死んでもらうわ」

あたしは肩をすくめた。

「どういう気分なんだ。ボレレッカ」

大男に向かって言う。

「殺人淫楽症の娘をもつ気分は？」

「なんだと？」

「まさか知らないわけないよな。実の娘が、ギャングの抗争を利用して射撃をくりかえし、流れ弾に見せかけて、人を、育ての親を殺していたことを」

「知っているさ。だが、この娘のおかげで俺は組織のナンバーツーになった。初めに俺の娘だと言われた時には驚いたが、調べてみると確かにその通りだった。今度のことも、ソラノが来るという噂を聞いて、奴を利用してボスを殺させるという、この娘が立てた計画さ。お前の正体を一目で見抜いたのもマイラだ」

「天才だね、一種の……だが、あたしはもう行くよ。あたしの仕事はスキヤフィーノを始末するところまで、あんたたちには興味がないんだ」

「このまま行かせると思うの？」

いつのまにか、魔法のようにマイラの手銃が現れていた。まっすぐにあたしの頭に狙いをつけている。

「思うよ。あたしもね、天才と呼ばれてるのさ、プロの世界で。もう十何年もね。あんたにあたしは撃てない。さよなら」

「さよなら」

最後の言葉は見事にシンクロした。

背を向けて歩き出すと、背後で轟音がとどろいた。

振り返らず歩き続けながら、あたしは、オーバーオール胸ポケットをまさぐって、切り取ったボルトネジの頭を床に捨てた。

マイラは切れすぎたのだ。

だから、ダイナマイトを先に見せて、もしあたしが彼女を疑っていても、それ以上、武器を調べさせないように計画を立てた。

でも、あたしはプロだ。

彼女が巧妙に隠した銃を見つけ、その銃口にボルトを打ち込んで、それが見えないうちにヤスリで頭を切り落とすことぐらい造作もない。

あたしのすることはそれだけでよかった

彼女は、絶対に、他人の手で、他人の武器であたしを殺させはしないから。

男たちが部屋に駆け込んできた。

あたしには目もくれず、スキヤフィーノと、吹っ飛んだボレッツカ親子の元に走って行く。

本当のところ、あたしはアルマイラが気に入っていた。あの娘には才能があった。でも、だからこそ、これから伸びる芽を摘んでおかないと、今度は自分の身が危なくなる。

因果な商売だ。

あたしはため息をついた。

チーフはマイラを欲しがっていた。新しい手駒として。

その上、面倒になって、あたしは男たちにソラノの説明をするのもやめてしまったのだから。

またチーフから憎まれ、より危険な場所に送られるに違いない。

あたしは、裏通りに停められた黒塗りの車に乗り込むと、運転手のチャーリーに言った。

「出してちょうだい」

「はい、お嬢様。ワシントンに向かわれますか」

「いや、屋敷に戻る。シャワーを浴びたい」

「わかりました」

チャーリーは、まったく加速度を感じさせない丁寧な運転で車を発進させた。

車窓を流れる汚れた街の上で、赤い夕陽が輝いていた。美しい色のはずだが、今のあたしにはそれが綺麗だとは思えなかった。

〈了〉